

「父と子」胡德華さんをしのんで



河津 啓介

飾らない笑顔がその人柄を何より表していた。中国の胡耀邦元総書記の三男、胡德華さんが3月30日夜に病気で倒れ、76歳

で亡くなった。

政治改革に生涯をかけた父の遺志を受け継ぎ、「民主」「自由」の価値を説き続けた胡さん。1カ月前に北京市内で久しぶりに顔を合わせたばかりだっただけに、急死の知らせが信じられなかった。

最後となった会話で、私は「今のご時世で外国メディアの取材を受けるのは難しいですか?」と話しかけた。最近は厳しい言論統制のため、外国メディアとの接触を避ける知識人が少なくないからだ。

すると、胡さんは「私に何もやましいことはないよ。いつでも話をするから遠慮なく連絡してきなさい」と約束してくれた。穏やかな表情の奥にのぞく気骨ある精神はやはり父譲りだったのだろう。

胡さんのような高級幹部の子女は「紅二代」と呼ばれる。そして、習仲勳元副首相を父に持つ習近平国家主席もその一人であり、両家は浅からぬ縁があ

る。父親同士は共に改革派の政治家として支え合う仲だった。その結びつきは、1989年の天安門事件の引き金となった胡耀邦氏の死去後も続いた。

90年代半ば、改革派雑誌「炎黄春秋」が胡耀邦氏の業績をたたえる論陣を張り、それが公式の再評価につながった。文化大革命(文革)など共産党の暗部にも切り込む同誌は当局の圧力にさらされていたが、習仲勳氏はその後ろ盾となり、直筆の激励メッセージを贈るなどしていた。

この雑誌を巡る息子たちの行動は対照的だ。文革の再来を防ごうとした父の背中を追うように、胡さんは後に「炎黄春秋」の副社長を引き受けた。一方、最高指導者となった習主席は党への異論を封じ、2016年に同誌を事実上の廃刊に追い込んだ。

当時、私の取材に、胡さんは父親の思想を「救民」と表現したうえで「党を民より上に置く『救党』の道を選べば、社会は閉鎖的になり、秩序維持を志向することになる」と指摘した。残念ながらその警鐘は現実になってしまったように思う。

4月6日、北京郊外で開かれた胡さんの告別式会場へ足を運んだ。周囲を固める警官から立ち去るようにならわれ、遠くから手を合わせるしかなかった。